



今こそ、読みたい

親 経って、彼の妻が「散骨をすませた」と教えてくれた。

好きだった海、しかも国内外五カ所に分けてまいたと聞いたとき、ふわっと明るい場所に出たような心地を味わった。以来、彼のことを思い浮かべると、なぜか幸せな気持ちになる。あちこち気ままに漂いながら本人も羽を伸ばしているに違いない、そして、彼女は穏やかに言う。「散骨がすんだら、むしろいつもそばにいたいと思えて目の前がぱっと開けた。想像もしていなかった心境が、自分でも面白い」それを聞きながら、思った。

散骨という見送り方は、悲しみの決算ではなく、大切な人の生を自分の手で全うさせた達成感、あるいは安心感をもたらす。散骨は、生きるを支える弔いの方法なのかもしれない。と。「晴れたら空に骨まいて」。本書の爽快なタイトルに、まず惹きつけられる。生と死が親身に手を繋いでいるような、からりとした朗らかさ。じつさい、著者に執筆を促したというエピソードが痛快だ。申カツを食べながら、母の友人が言った言葉にぱっとしたという。「もうすぐグネパールに行くんだ。旦那の骨を撒きに！」

大切な人の生を全うさせ 新たに結ばれる弔いの儀式



『晴れたら空に骨まいて』 ありお 川内有緒 (ポプラ社/1500円)

八年前に亡くなった夫の遺骨を、彼女はクッキーの缶に保存し、何年もかけて世界中の川や海にまいていくと聞き、著者は、生と死にまつわる自由の意味を、のぞきこむ。死を題材に扱うノンフィクションでありながら、本書がユーモアや開放感を伝えてよこすのは、発見の目が終始いきいきと弾んでいるからだ。

五組の家族の、大切な人をめぐる五つの物語。いずれも風の匂い、土地の日射しをふんだんに感じさせる。人間が生きるといふことは、おのずと自然との関係を深めることでもあるのだ。

亡き夫の骨を自分で碎き、何年もかけて旅をしながら、好きだった場所にはらまいた妻。ミクロネシアの小さな村に移住し、妻を見送った男性。絵を描く旅の途中、チェコで客死した父を現地で弔った家族。登山家だった夫との生前の約束を果たすため、ヒマラヤに挑戦した六十一歳のフランス人の妻。インドで出会った友人を看取り、インドの川に選んだ青年とその家族——人生の中身はばらばらでも、みなに通じているのは、あくまでも「個」として生きようとした自由人の気風だ。

その究極のかたちを描くのは、登山家、原真とエリザベスを描く「マカルーで眠りたい」。原は少人数・速攻登山を提唱、先鋭的な登山研究で知られた登山家であり、医師だ。実弟の山での遭難死を経験し、なわかつ数々の山を征服した原は、独自の死生観を培っていた。つねに死と背中合わせの夫の登山を見守る、アルザスから名古屋に嫁いだエリザベスが歩む人生もまた、驚くほど野太くたくましい。原一家のありかた、残された家族が五年後に行った鎮魂の登山、そして遺言の散骨。散骨という選択によって、家族がひと回り、ふた回りも大きな存在となつて結ばれるさまが、死の意味をあらためて問い掛ける。

清潔な筆致に、著者のまつすぐな眼差しを感じる。好奇心を超えた共感の力。そこには、どこでどう暮らしても「個人」であろうとし、自由の意味を体現した人々への敬意がある。読後、晴れやかに空を見上げたくなる一冊だ。

平松洋子 (ひらまつ ようこ) 1958年、岡山県生まれ。食文化や暮らしをテーマに執筆。2012年『野蛮な読書』で講談社エッセイ賞を受賞。近著に対話集『食べる私』など。最新刊は『彼女の家出』

読んでたどる歴史

歴史の本質を見据える リアルなフィクション

文禄4(1595)年7月、関白豊臣秀次は太閤秀吉から謀反の嫌疑をかけられ、切腹を命じられた。翌月、彼の妻妾と子ども39人は京都の三条河原で斬首された。秀次事件である。

この事件についてある研究者が秀吉には秀次に死を命じる積極的な気持ちはなかった、とする論を唱えている(ネットで容易に検索できる)。ぼくは疑問に思う。もし秀次の切腹が不幸な事故にすぎなかったら、あの無残な三条河原の殺戮は何だったのか。やはり秀吉は当初から、圧倒的な悪意をもって、秀次とその生の痕跡すべてを消し去るつもりだったのではないか。研究は古文書を丹念に読んで成果であるという。だが、良質な史料の代表である古文書にも



ウソ・偽りはある。作者の隠された意図もある。表面的に読むだけでは、歴史の真実はなかなか姿を現さない。

秀次の側室の一人に、駒姫がいた。出羽の大名たる最上義光の娘で、東国一の美少女といわれた。いま側室と書いたが、彼女が国元から上京した直後に秀次は切腹した。だから彼女は秀次と暮らしてない。会ってすら、いない。それなのに死を命じられる。そんな理不尽があるものか。最上家の男たちは姫の奪還に奔走する。だが敵は信長を凌駕する専制君主、秀吉。それはきわめて困難な仕事だった。果たして駒姫は助け出せるのか。小説家が的確に史実を射貫くことがある。本作はまさにそれではないか。小説だから、もちろんフィクションは含まれる。駒姫の侍女・おこちや、彼女の許嫁・鮎延主殿助(モデルは鮎延秀綱か)は架空の人物だろう。けれど作者の目は、しっかりと秀次事件の本質を見据えている。重く、だが、きわめて興味深い本である。フィクションは時に、歴史研究を超えていく。

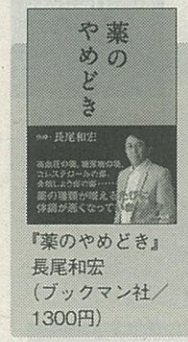
本郷和人 (ほんごう・かずと) 1960年、東京都生まれ。東京大学史料編纂所教授。中世政治史、古文書学専攻。史料編纂所で『大日本史料』第五編の編纂を担当。著書に『戦国武将の明暗』『天皇にとって退位とは何か』など

健康あれば憂いなし

医者言うがままに 飲み続けなくてもいい

現代日本の高齢者は、ざっと7~8種類、ときには10種類以上の薬を飲んでいて人が少なくないという。私の両親も高齢なので、例に漏れず、降圧剤、コレステロールの薬、睡眠薬などを多剤投与されている。シロウト目にも「こんなに飲んだらかえって調子が悪くなるだろうに」と心配になるが、マジメな患者である彼らは、処方した医師の言うことに素直に従っている。

そもそも患者本人や家族には、というか、治療のプロであるはずの日本の医療人にも「薬のやめどき」という発想はあまりないらしい。だが、末期がんの患者が亡くなる当日まで抗がん剤を打っていたり、胃ろう栄養の寝たきり患者が栄養剤の量も調整されないままインスリン



を1日4回欠かさず注入されていたりする光景は、ブラックジョークのよう。そんな日本人の治療や服薬とのつき合い方を、著者は嘆く。本書では、「降圧剤」「抗がん剤」「抗不安薬」など薬別に、やめるタイミングや上手に減薬していく方法を、根拠を示しながらアドバイスしている。

著者によれば、抗がん剤のように、治療の時系列の中で患者自身が最終的にいつやめたいかを判断すればいい薬もあるが、飲む意味がなかったり、やめどきの判断がより重要なものは、薬効より副作用が大きい抗認知症薬や生活習慣病治療薬。副作用によって、人格が変わったり寝たきりのきっかけになったり、患者の尊厳さえ奪う可能性がある。それらの薬は、漫然と続けることや、むやみに増量することのリスクがあまりにも大きい。

三浦天紗子 (みうら・あさこ) 1964年、東京都生まれ。ライター、ブックカウンセラー。ブックレビュー、ウーマンズヘルスなどの記事を執筆。主な著書に『そろそろ産まなきゃ 出産タイムリミット直前調査』『震災離婚』など